

## 平和を祈り、千羽鶴を作りました！！

7月20日(月)HRの時間に、YWCAの生徒と宣教師のカールソン先生が中心になって各クラスに呼びかけ、戦後75周年に平和の祈りを込めて中高の生徒全員が2枚ずつ折紙で鶴を折りました。千羽鶴を2束つくり、人類最初の原爆投下地の広島と長崎に送りました。



函館でも、終戦間際の1945年7月14・15日にアメリカ軍のグラマンという戦闘機50機による空襲がありました。アメリカ軍の主な狙いは、連絡船でしたが、一部市街地にも爆弾が投下され、機銃掃射も行われました。

被害を受けた市民の一人は次の様に語っていました。「逃げる時間もなく、しゃがみ込む位にするのが精一杯でした。危険だ！私はしゃがみ込んで、息をこらしていました。すると玄関の近くにいた友人が、逃げ出したんです。外の方へ後ろ向きに走ったとたんに、爆弾で一瞬のうちに、友人は血だるまになって倒れていました。」そして家々が押しつぶされ、「火災が発生して、家から家へどんどん燃え広がり、煙がもうもうと立ちこめていました。あっという間に火が移っていました。」この時、遺愛の生徒、当時15歳の星野佳代さんが、機銃掃射で足に大怪我をしました。

遺愛では、やはり1945年(昭和20年)の5月・6月に、遠く北海道最北端の稚内近くまで援農(農業の手伝い)に上級生の半数が行かされました。普通、函館からだと帯広など豊かな農業地帯に援農に行ったようですが、遺愛は敵国アメリカの建てた学校ということで、5月21日に幌延に40名、6月1日に豊富に32名の生徒が汽車に20時間揺られて向かいました。のみやしらみに悩まされ、風呂も満足に入れず、嫌がらせもあったようでしたが、「お国のため」という一心で耐え抜いたそうです。8月15日に終戦を迎えましたが、生徒が函館に戻れたのは10月の末でした。サハリンからの引揚者が優先されたとのことでした。

戦争が始ってしまえば、それを途中で止めることは不可能です。行くところまで行ってしまいます。ですから、可能な限り戦いを回避する知恵が必要だと思います。知恵とは、まず、戦争をすることで国民が幸せになることは決してないということを肝に銘じること。また、国家間のやりとりでは自国の利益のためはかなり厳しいやりとりをせざるを得ないことがあります。でもリーダーや交渉者がカッとなって、拙速で間違った判断をしてしまうと多くの国民を犠牲にするという取り返しのつかないことになってしまいます。本当に国民のことを考え、粘り強く交渉できるリーダーを選出すること、支えることでしょう。

生徒の皆さんには、8月の平和についての特別報道や特集番組をつとめて見て、自分なりに考えて欲しいと思います。聖書にありますように、平和は与えられるものではなく、私たちが実現するものです。そのためには何をすべきでしょうか？共に考えていきたいと思っています。

2020年7月27日(月)